

2025 年の「霜降（そうこう）」は、10 月 23 日から 11 月 7 日までの時期を指します。

霜降（そうこう）とは、朝晩の冷え込みがさらに増し、北国や山里では霜が降り始めるころ。露が霜に変わり、だんだんと冬が近づいてきました。

秋が一段と深まり、冬に向けて気温がグッと下がる 10 月下旬ごろ～11 月上旬ごろの時期を指します。秋が深まる霜降は、露（つゆ）が冷気によって冷やされて凍ることから、霜（しも）が降り始める時期であるという意味が込められています。

暦の上では秋の最後の節気で、寒さが厳しくなり露が凍って霜が降り始める時期です。

霜降期間のなかにある、文化の日を含む 2 週間は

「読書週間（10 月 27 日～11 月 9 日）」とされています。

中国の詩人・韓愈（かんゆ）が書いた【燈火可親】（とうかかしん）という詩があります。【灯火親しむべし】と訓読みされます。

「秋になって長雨がやみ、涼しい風が吹いている。灯りをともして読書をするのにぴったりな時期だ」という意味合いです。

この言葉が日本に伝わり、過ごしやすい秋の夜長に読書をする習慣を意味する言葉として広まりました。

読書週間告知のポスターにも「秋です。本です。読書です」や

「キラリ 知性 秋の 1 冊」などのコピーが登場して、いつしか

「読書の秋」が秋を代表するキャッチフレーズになったそうです。

活字離れといわれて久しいですが、一方で電子書籍が著しく成長するなど、本を読むことへの関心は衰えていません。書店や携帯端末で面白そうな「本」を購入するもよし、図書館に行くもよし。日を追うごとに夜の長さを実感できるこの時期、普段あまり本を読まない方も、秋の夜空を見ながらのんびりと読書を楽しむ時間を取ってみては如何ですか。



古来、春の桜と並び称されてきたのが、秋の紅葉（もみじ）です。

～奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞くとときぞ秋は悲しき～

「奥深い山でもみじを踏み分けながら鳴く鹿の声を聞くととき、秋はひときわ物悲しく感じられる」といった意味です。

三十六歌仙の一人、猿丸太夫（さるまるだゆう）による歌として『古今和歌集』と『小倉百人一首』に収められています。

古今集では「詠み人知らず」として紹介されています。

本来、秋は米の収穫の時期で、実り豊かな楽しい季節で農村生活からはこうした発想は出てきません。

この歌は、貴族という都会生活者の感覚から生まれたものといえるでしょう。

